

Interview

駐日ラテンアメリカ大使 インタビュー

第42回 エルサルバドル共和国

ディエゴ・アレハンドロ・ダルトン・ロサレス
駐日エルサルバドル大使

ビットコインで新たな可能性 を拓くー日本との協力と交流の 拡大に期待



エルサルバドルのダルトン駐日大使は、ラテンアメリカ協会のインタビューに応じ、日本の印象、エルサルバドルの魅力、ブケレ政権の政策課題、日本との関係、大使としての取り組みなどについて語った。同大使は、1982年生まれ、外務省経済関係局、駐日大使館、駐イスラエル大使館、駐カタール大使館等で勤務の後、2021年3月から駐日特命全権大使。インタビューの一問一答は次の通り。

一大使は、昨年3月に駐日大使として着任されましたが、今回が2度目の日本での勤務と伺っています。日本についてどのような印象をお持ちですか。これまでの日本滞在で最も印象深い思い出は何でしょうか。

この美しい国での勤務は2度目になります。日本に来るすべての外国人と同じように、私の第一印象は、秩序、清潔さ、礼儀正しさ、そして敬意だったと思います。しかし、日本はそれだけではなく、1000年以上に亘る豊かな歴史と伝統を持つ国であり、現在と未来に過去が響き合うユニークな国だと思います。

職業人としては、日本人の誰もが日常的に行っていることにいつも感心しています。コンビニやショッピング・センターに行っても、工芸品の職人の仕事ぶりを見ても、人々のこだわりとひたむきさが際立っています。私が非常に素晴らしいと思う日本の哲学の一つは「おもてなし」であり、もう一つは私も職場や家庭で日々実践している「カイゼン」です。

雨季と乾季の二つの季節しかなく、緑、青、茶色が支配的な国で生まれ育ってきた私にとって、日本は季節によって多様な色彩があるのが印象的です。日本アルプスや北日本の雪、夏の花火の色と轟音、色とりどりの秋、そして私が最も特別だと思う、列

島全体を白とピンクで包む桜など、四季折々の風景を見て体験するのはとても楽しいことです。

ーエルサルバドルは「中米の日本」とも呼ばれるほど勤勉な国民性で知られていますが、文化、歴史、伝統など、エルサルバドルの人々が誇りにしていることは何でしょうか。

エルサルバドルは、1821年に独立した若い国です。12年間の内戦から立ち直り、しっかりとした社会を築いており、現在、次のような点で注目されています。

300年前から高品質なコーヒーの生産国です。1970年代、エルサルバドルは世界第3位のコーヒー輸出国でしたが、内戦や気候変動の影響を受けたものの、1992年に内戦は終わり、復興した今はスペシャルティ・コーヒーの輸出に力を入れています。優れたコーヒー・スクール、世界的な賞を受賞したコーヒー農園、世界バリスタ・チャンピオンを擁しています。

日本のように農業の伝統があり、コーヒー、トウモロコシ、砂糖などを栽培し、環境に配慮した農業を行っています。興味深いことに、かつてエルサルバドルの先住民も藍を栽培していましたが、農業の変化により衰退しました。1990年代に国際協力機構（JICA）を通じて、日本から苗を移植し藍の栽培と染

色を回復させるプロジェクトが開始されました。今、エルサルバドルは再び藍染めの名産地となっています。

エルサルバドルは伝統的な料理も誇りにしています。夕食時や週末、休日には家族と一緒に食事をすることが大切な文化となっています。また、自然も誇りに思っています。火山、湖、ビーチなどの美しい景観や公園があり、火山の噴火で埋もれたマヤ遺跡「ホヤ・デ・セレン (Joya de Cerén)」(「アメリカ大陸のポンペイ」と呼ばれ、ユネスコの世界遺産に認定)などの遺跡の保護にも力を入れています。四国より少し広いだけの国土に、これほどまでに多様な自然が存在するのです。

さらに、私たちの国民は、温かく、優しく、勤勉です。人々は変化を恐れず、多様な分野で責任感と革新性をもって取り組んでいます。レベルの高い基礎教育が普及し、大学などへの進学率も向上しています。若者の大半がスペイン語と英語のバイリンガルで、デジタルツールにも高い適応力を示しています。学術、政治、ビジネスの分野で女性リーダーの参画が顕著になっており、ジェンダーと社会的包摂への配慮はエルサルバドルの文化の一部となっています。

一貴国では、2019年にブケレ大統領が史上最年少(38歳)で大統領に就任し、国家の変革を掲げて積極的な政策を打ち出していますが、その狙いと内容を教えてください。

ブケレ大統領が策定した「国家計画」は、次の3つの柱で構成されています。

(1) 経済活性化：様々な経済分野の活性化により、経済成長を目指す。エルサルバドルは、その戦略的な地理的位置と投資家に優しいビジネス環境を活かすことにより、貿易と投資における地域的・国際的なハブとなり得る。新しい経済路線は、物流インフラの整備と諸手続の合理化、税制優遇、技術革新やクラスター形成と連携した産業変革、国家制度の近代化、エネルギー部門の強化、雇用と起業の創出などを通じて、輸出可能品目を拡大し、外国投資を誘致し、観光を振興することに焦点を当てたものです。

(2) 社会福祉：持続可能な開発目標(SDGs)を達成するために、国民全体の安定した生活環境、教育、健康、開発の実現を目指す。エルサルバドルの人的・社会的発展の指標を高めることを目的としており、その分野は、児童のための開発(特に大統領夫人が

主導する児童開発支援のための国家政策)、女性のエンパワーメント、気候変動、交通システム、年金制度などです。

(3) 治安：平和で民主的な生活・労働環境を保証するため、治安状況の改善を目指す。その活動分野は、領土管理計画(監視・治安システムや刑務所の近代化、ギャングの逮捕、受刑者の更生プログラム)、国家市民警察の強化、社会保護ネットワークの再構築(若者向けの文化・訓練センターの設立、インターネット電波範囲の拡大、診療所やコミュニティセンターの拡大)、移民・帰還民への配慮、社会的弱者支援プログラムなどです。



エルサルバドル国際空港(駐日エルサルバドル大使館提供)

一貴国では、世界に先駆けて暗号資産ビットコインを法定通貨として採用しましたが、その狙いと利用状況について教えてください。

2021年9月7日に施行された「ビットコイン法」により、ビットコインが法定通貨になっています。その目的は、国民に金融・銀行システムの代替手段を提供し、国際送金の効率を高めるとともに、暗号資産のエコシステムに対する投資を誘致し、雇用を創出することです。

国民の約70%は銀行口座を持たず、経済のインフォーマルセクターで働いているため、ビットコインは彼らを国の経済に組み込むための金融包摂のツールとなります。エルサルバドル国民が国際送金のために支払う手数料は年間4~6億ドルと言われており、ビットコインや手数料無料のデジタル・ウォレットは、送金の新しい仕組みとして注目されています。

また、ビットコインの使用は任意です。現政権は「チボ・ウォレット(Chivo Wallet)」と呼ばれる独自のデジタル・ウォレットを作り、現在400万人以上のユーザーがいます。これを通じてビットコインとド

ルの取引ができ、ビジネスにおける支払いツールとして機能しています。エルサルバドル人なら誰でも無料でダウンロードでき、取引手数料は無料、24時間365日利用できます。チボ ATM は全国に200台、米国のエルサルバドル人コミュニティには50台が設置されています。

さらに、ブケレ政権は、ラ・ウニオン県にスマートシティを建設し、住宅地、店舗、サービス、娯楽、港、鉄道の建設と、都市のエネルギー需要や暗号通貨のマイニングに地熱を利用する「ビットコイン・シティ」プロジェクトを提案しています。そこでは、資本税、所得税、不動産税、住民税がすべて0%で、CO₂排出量も0%になります。

―北米・中南米市場を睨んだエルサルバドルの外交政策はどのようなものでしょうか。

4つの柱からなるブケレ政権の外交政策には、投資誘致と貿易促進があります。

エルサルバドルは、北米、中米、カリブ、南米、ヨーロッパ、アジアとの間で13の貿易協定を有しており、42の経済圏に特恵的アクセスが可能です。具体的には、米国及びメキシコとの自由貿易協定（FTA）、中米経済統合条約、パナマ、ドミニカ共和国、コロンビア、チリとFTA、キューバとエクアドルとの部分的な協定、欧州連合（EU）及び英国との経済連携協定、韓国や台湾とのFTAがあります。

また、貿易協定の活用と深化、二国間、地域間、多国間の貿易関係の改善を主な目的とする現政権の「クスカトラン計画」に沿って「貿易・投資政策2020-2050」が策定されています。エルサルバドルは、北米、南米、中米、カリブ地域への接続とアクセスが容易な戦略的立地に加え、物流インフラ、17のフリーゾーン、投資家にとって魅力ある法的枠組みなど、ビジネスを行う上での比較優位性を有しています。



アカフトラ港のロジスティクス・ハブ（駐日エルサルバドル大使館提供）

―日本とエルサルバドルの二国間関係について、どのようにお考えですか。

両国は1935年に国交を樹立し今年で87年目になりますが、その協力、貿易、投資、友好の歴史は、多くの重要な要素を含んでいます。

1953年、トヨタ自動車はエルサルバドルに初めて5台の車を輸出し、アメリカ大陸での最初の商取引となりました。日本企業による中南米への最初の投資は、1956年のエルサルバドルの繊維産業への投資でした。それ以来、エルサルバドルの繊維部門は力強く発展し、世界中の重要な市場に高品質な製品を輸出しています。

エルサルバドルは、1968年にラテンアメリカで最初に日本の政府開発援助（ODA）と青年海外協力隊の支援を受けた国です。以来、日本の協力隊は、スポーツ振興、障害者支援、日本語・数学教育、地域経済振興などで大きく貢献しています。

地震、火山噴火、ハリケーン、洪水など自然災害は、両国に共通する課題です。日本は、1998年のハリケーン「ミッチ」、2001年の地震、2005年、2009年、2011年のハリケーン・洪水の後の復興に協力し、エルサルバドルの災害リスク管理計画は、主に日本の専門家の支援によって策定されました。最近では、日本の融資によって、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）治療を専門とするエルサルバドル病院の建設が可能になりました。エルサルバドルも、2011年の東日本大震災の際には、ささやかながらも心からの寄付や支援表明を行い、日本との連帯を表明しました。日本政府は、ラ・ウニオン港の建設や東部地域の再活性化など、道路や物流網の再建に貢献しており、新しい物流インフラの整備も支援しています。

結論として、両国の関係は、互いに対する尊敬、愛情、そして感謝の気持ちに基づいています。エルサルバドルでは、日本から来た人をいつも笑顔で迎えるとともに、国際組織においても、共通の立場に基づいて日本政府への支持を表明しています。とりわけ、2019年にブケレ大統領が政権発足した後、最初に公式訪問した国が日本であったことが親密さのあかしです。

―二国間関係の強化に向けて、大使が特に力を入れて取り組んでおられることは何でしょうか。

大使館としては、特に次のような取り組みに力を

入れています。

(1)「サーフシティ・エルサルバドル (Surf City El Salvador)」という観光開発事業の紹介に努めています。エルサルバドルのビーチは大変美しく、その波はプロ・アマを問わずサーフィンに最適です。2019年から「サーフシティ」では、様々なサーフィンの世界大会が開催されています。今年も、国際サーフィン連盟 (ISA) の世界ジュニア選手権大会とワールドサーフリーグ (WSL) の世界選手権大会が開催されました。日本の五十嵐カノア選手なども「サーフシティ」の魅力を認めています。

(2) 日本の企業、団体、学術機関とデジタルツールや金融技術を推進するための提携を行うことにより、エルサルバドルでのビットコインの経験を共有するとともに、特にプログラミング、ビデオゲーム、人工知能の分野で成功しているエルサルバドル人と日本のスタートアップとの交流を図ろうとしています。

(3) エルサルバドルのコーヒーのプロモーションを強化し、エルサルバドルで生産される多様な品種と、コーヒーが持続可能な開発目標の達成において非常に重要であることを知っていただくよう努めています。農業経済の大部分はコーヒーに依存しており、2万5000以上の家族がこの産業に従事しています。火山性の土壌とコーヒーの森の条件が、おいしいコーヒーを生み出すのです。日本は私たちのスペシャリティー・コーヒーのアジアにおける最も重要な買い手です。コーヒーの試飲会を開催したり、日本のコーヒーショップのオーナーやバリスタが農場を訪れ、生産者と直接触れ合うことを支援したりしています。

(4) 日本におけるエルサルバドル人研究者のネットワークの形成に努めており、これにより、両国の大学間の学術交流、研究者の共同研究、日本人学生の短期留学、共同バーチャルセミナーの開催等に繋がりたいと考えています。

—『ラテンアメリカ時報』の読者に対してメッセージがあれば、お願いします。

読者の皆様にも、エルサルバドルが、国民が繁栄と発展の機会を得られる近代的な国家へと脱皮しつつあるこの重要な変革に参画していただきたいと思っています。私たちの最大の資産は国民です。だからこそブケレ政権の政策は、国民のニーズに焦点を合わせています。

戦後の日本が国際社会に目を向け、貿易や投資を促進したように、我が国もまた、豊かで活力ある未来を築くために信頼できる戦略的パートナーを求めています。今回のインタビューをひとつの契機として、日本の企業人がエルサルバドルを訪れ、投資先として検討いただけることを強く期待しています。

最後に、エルサルバドルは、有望な将来への移行期にある若い国ですが、その特徴は、人々、温かさ、親しみやすさ、献身、勤勉さという、容易に真似することができない無形の資産です。ぜひ、実際に来て、エルサルバドルの「おもてなし」に触れてみてください。

(注) 本インタビューのスペイン語全文は、ラテンアメリカ協会ホームページ英語サイトに掲載しています。

(ラテンアメリカ協会副会長 佐藤 悟)